

「現代と宗教」を考える

- 野坂 法行（千葉県妙嚴寺住職・全国布教師会連合会会長）
影山 教俊（千葉県釈迦寺住職・現宗研元主任）
赤堀 正明（千葉県常不軽寺住職・現宗研元主任）
大西 秀樹（京都府松林院住職・現宗研元囑託）
竹内 祥起（大阪府妙見閣寺住職・現宗研元囑託）
高佐 宣長（現宗研主任）
- 司会

肩書さは開催当時のものです

司会 現代宗教研究所の五十周年を締めくくらせていただくシンポジウムでございますが、それぞれ独自の活動をされておられる五名の方々——皆さん三原所長の推薦でございます——にシンポジストをお引き受けいただきました。各聖には、現代と宗教という課題をご自身でどのようにおとらえになって、日蓮宗として、あるいはその立場を超えて、どのようにそれに取り組んでいらっしゃるか、取り組んでいくべきとお考えかということについて、おのおのご発題をしていただくというところでお願いをしております。

順番は、いわゆる日蓮宗名簿の掲載順でございます。全く他意はございません。では、さっそく、野坂上人からお願いをいたしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

野坂 皆さん、こんにちは。トップバッターということで、最初に私の思っているところを、少しまとめてお話をさせていたきたいと思います。

「現代と宗教」という大きなタイトルが現宗研の方から出されまして、私は「立正安国と環境問題」というようなことを、考えてみたいと思います。宗門運動が「立正安国とお題目結縁」ですけれども、その立正安国ということと環境問題について、少し論及できればというふうに思います。

で、今さら言うまでもないことですけれども、仏教の根本聖典である法華経の教え、その教えの中の諸法実相、あるいは十界互具・一念三千といったようなことは、もうここにお集まりの皆様方は、あえて言うまでもなく、それが重要な、法華経を承知する上での大きなキーワードである、基本理念というふうに申し上げてもいいのかなと思いますが、ものの見方、考え方、とらえ方ですね。ちょっと硬く言えば、宇宙観、世界観、生命観、人間観、そうしたものを日蓮聖人は、私達の礼拝の対象である大曼荼羅御本尊として図示をされたというふうに、私は受け止めております。

まさにそれは立正安国ということのお考えの図式化でもあった。しかも、この文字で書く大曼荼羅、絵でなくてですね、文字で書く大曼荼羅というのは、必要があれば、いつでもどこでも表せて、すぐに御本尊としてそこに勧請することができるという、大変優れた、私がそんなこと言うのも何ですけれども、素晴らしいアイデアなんだなというふうに日蓮聖人の発想のすごさというものを、尊敬の思いを持って受け止めています。

その大曼荼羅御本尊の中央部に上行・無辺行・淨行・安立行の四大菩薩が勧請されていることは、皆さん、ご承知のとおりです。四大菩薩というのは、生命を成り立たせるために不可欠な四つの要素ですね。四大とか五大とか言うんですけれども、最後の空はともかくとして、四大は地・水・火・風ということ、これはいずれも、よく、「四大不調和にて、誰々さんは亡くなりました」というようなことを言いますが、この四大が調和していることによって生命

が成り立つという、生命が成り立っていくためには不可欠のファクターであります。

地というのは、もう大地そのもの、母なる大地ですから、いのちを生み出してくるし、水は、アカの水と言ったりして、やっぱりこれも非常に重要な、命にとってなくてはならない。それから、火というのはですね、私は太陽であろうと。上行という言い方がですね。上から照らすことをもって専らの使命とする、ちよつと敷衍ふえんして考えれば、これはもう太陽そのものかなと。それから、風というのは、空気がなければ風は起きませんので、風というのは空気であるというふうな理解をすると、この四大菩薩というのは生命を成り立たせるためになくてはならない四大ということ象徴しているというように受け止めております。他の方の中にも、そのように当然受け止めてらっしゃる方もおられると思います。

で、「我々は四大菩薩と共にあり」ということで、「私達が立てば四大菩薩も立ち、私達が道を行く時は四大菩薩も共に道を行きたもう」などということも、日蓮聖人はおっしゃっておられます。

四大菩薩が絶えず私達のいのちをサポートしてくれている。この四大菩薩が、私達が根本的に尊重すべき、何よりも大切にしなければならぬ大曼荼羅御本尊の最上部に、釈尊・多宝如来の隣に勧請されているということは、きわめて重要な意味があります。この地・水・火・風の象徴、四大菩薩を穢としたり、損なったり、疎略に扱あう行為は法華経を承知し、題目を唱える者にあつてはならない、いわば教えしよに正法に悖もる行為だということふうにもできると、思います。

実は、全然話が違ちがうんですが、IPCですね。Intergovernmental Panel of Climate Change（インターガバメンタル・パネル・オブ・クライメット・チェンジ）というふううに言われているようですが、日本語では、「気候変動に関する政府間パネル」というふううに言われているもので、このところずいぶん会合を持って、最近地球の環境問題に対するいろんなこと言っています。

一番言っているのは、この地球環境が悪化してきたのは、ひとえに人間の活動によると。他の動物は地球環境を特に汚してはいません。人間が、人間ののもろもろの活動ですね、特に文明的な活動、便利さを求めた結果がこういう状況になってきていると。この地球環境を悪化させ、自然環境を悪化させてきているのは、専ら人間の諸活動によるということ、明確に結論づけて、それに対する対策ということも、もちろん言われているわけです。

そういう中で日蓮聖人が、これは真蹟があるの、ないのというようなこともあるのですけれども、「衆生の心穢るれば土も穢れ、衆生の心淨ければ土も淨しとて土に二つの隔て無し、ただ我等が心の善悪によると見えたり」というようなことを、一生成仏鈔でおっしゃっておられます。これ、曼荼羅本尊のお考えからすると、当然こういうようなお言葉は、日蓮聖人から出てきて不思議ではないなと思います。

いろんなことが問題になっている原因が、結局我々の衆生のものの見方、考え方、認識の誤りということによるよくだということです。要するに、人間の欲望の肥大化ということが、環境について問題いろいろなことを引き起こしてきている。オゾンガスであれ、温暖化の基であれ、それらのことは全部人間が行っている所業による。そういう、いわゆる欲望の肥大化ということで、地球とその環境は、人間の欲望をどこまでも、どこまでも許容してくれるほど、寛大でもなければ、巨大でもないというふうに思います。そういういろいろなところで、すでにいろんな問題が具体的に起きてきております。少欲知足という、これも法華経の最後の方に出てくる言葉ですけれども、やっぱり少欲知足ということが、大変求められてきているのかなというふうに思います。

このようにして当たり前と言えば当たり前なのですけれども、仏教の根本聖典・法華経の教えは、将来の子孫に対して健康で幸せな生活を保証し、天寿を全うできる健全な生命の星・地球を維持していく。ある意味では安国と言ってもいいですね。立正安国は、環境問題にも基本理念を提示、提供できるものだというふうな認識を皆さんと共有できればありがたいと思います。

ともかく法華経・仏教・宗教というのは、人間社会・人間活動のあらゆる分野の指導理念、あるいはあるべき様と
いうものを示してくれるものだというふうに、私は日頃から考えておるところでございます。

一応、私の方からの発題はこういう状況で、以上とさせていただきます。ありがとうございました。

司会 野坂上人、ありがとうございました。では引き続き、影山上人、お願いをいたします。

影山 影山です。一応、十分以内に全部収めるつもりでおります。皆様方のところにお話しするレジュメが行っており
ますので、何を言いたいのかは大体お分かりになったと思いますが、ちょっと補足してお話をしたいと思います。

いろいろ話をするときに、人の立っている場所というのがとても大事になってきます。例えば大学の先生が仏教の
講義をすれば、大学で教わる机の上の議論になるわけです。ですから、そういう意味では、私のプロフィールを見て
いただければお分かりのように、布教現場の人間ですので、現場からものを考えてお話をします。

それで、特に「現代と宗教」を考えると、この社会と宗教という関係で見れば、私は現代宗教研究所でおよそ二
十年ほど前から、この現代の少子高齢化の到来とゼロ葬時代、葬儀ゼロの時代が来る話を、ずっとやってまいりま
した。まさに、今、その寺院経済の基盤が崩れることを予測して、発言をしてきたわけです。

それは基本的には葬儀法要対応型の寺院運営、布教体制が問題だということなんです。特に少子高齢化社会になっ
た瞬間、日本人が貧しくなった瞬間に皆が葬儀をしなくなった。葬儀しなくなったのではなく出来なくなった。実は
葬儀の商品化によって、それを買えない話が社会で動いているわけです。

そこには商品としての宗教はあるけども、宗教としての宗教がないというような言い方ができてしまうのです。で
すから、私はその教化学の確立というところで、今から十五年前に、「教化学研究発表大会」を、私の主任時代のと

きに始めたわけです。布教の現場から社会と宗教の関係を考えていたきたいということだったわけです。

特にこの教化学という言葉ができた背景には、現宗研の五十年の歴史の出発がある。それは創価学会が大躍進したという問題が起きてきたからです。その問題は何か。これはレジュメののところに触っていますが、これは一生懸命「教学的にあいつら違っているぞ」って言っていたにもかかわらず、昭和三十九年には公明党ができ大変な状況になった。教学が間違っているのに創価学会は大躍進した理由、これを何とか明らかにしなきゃいけないというところで、現代宗教研究所ができ上がって、教化学ということをはじめたわけです。

なぜ、日蓮宗が教学で間違いを批判したにもかかわらず、あの組織があれだけ伸びたのか。これは教学だけの理解では分らない。要するに、同じお題目唱えて、理屈は違うけども、やっていることは同じ。あの時代、創価学会はお題目を幸福製造機と言ったのです。つまり、お題目を真剣に唱えていたのです。不幸があつたら、「ばかね。お題目足りないからよ」などと言って、頭たたきながら、一生懸命、お題目唱えさせたのです。

ところが、日蓮宗の方は教学理論で対応した。裏を返せば、教学理論を車の図面に例えれば、「俺のところの車はエンジンがかいから、速いんだ」という話をしてるだけで、完成品を作って、テストドライブしてないのと同じです。創価学会の車は未熟だったかもしれないけども、テストドライブしてたつていうことになるわけです。どうしるかといえば、その車に乗って、幸せに行き着いたから、人がついて来たわけです。

ということとは、よく考えていただきたいのは、今まで教化学は、「教学の現代化」と言っていないながら、五十年たつても、教学の教学的解釈というか、教学の現代語訳というか、教学を教学的に扱っていたのです。つまり、教学というのものはもの事の観念化ですから、理解することと、出来ることとは違うのです。

ところが、車運転するのは主体化ですから、自分が乗っかって、どう走るか。ぶつかったり、こすったりするだろうけども、とにかくまっすぐ走ろうって努力するわけですから、その運転者たる我々が、車をちゃんと運転してない

というふうに見えるのです。

悩みのある人が、真剣にお題目唱えたら、いろんな不安は、コントロールできる。手合わしたり、拝んだりするということは、ある意味では自己コントロールの技術になってくるわけです。

私は、肩書きを見てお分かりのように、水かぶったり、木剣振ったり、そんなことを長くやってきたもんですから、修行した人間が、他の人と何が違うかと言えば、学問やった人と違うと言った方がいいかもしれませんが、「できることとできないことの区別」がつくということなのです。

頭の中で考えることは、できてもできなくても、理屈が分かれればオーケー。ところが、実際に体験的なことやっていると、「これはできない」「できる」とはつきり分かるんです。今のその行堂問題、ちよつと話が違っちゃうんでやめますけども。「できない」ということを認めずに、できるつもりでやってるから、変なところへ行ってしまうのです。

実際に、教学というのは観念化の作業であって、学問は、仏教的に言ったら、これ煩惱そのものです。分別するんですから、ものを分けて考えることは煩惱です。少し言葉を変えれば、教化学は教学の主体化です。自分自身のことを教学で、どう自己コントロールするかが問われるわけです。

ですから、僧侶自身がお題目を本当に唱えて自己コントロールし、少なくとも心と体が、ある程度調和できるようになる。そういう宗教的な、具体的な体験を積み上げていけば、必ず社会のニーズに応えられると思う。言語的にあだ、こうだいう、それは言語の話で、実際には具体的な体験で、自己コントロールすることが、一番大事なことだと思ふのです。

特に修行について皆さんのお手元へ答えをお渡ししてあります。一番初めは、荒行堂の名前で「法華経寺」から発信された明治三年の文献なんです、そこに「止観病患境」で、一生懸命修行しろと書いてある。

この「止観病患境」とは『摩訶止観』第七章「正修行」三節のことで、日蓮宗の修行は止観だということです。それは『観心本尊抄』に、「法華経並びに摩訶止観等の明鏡」と、はつきりとおっしゃられてる。そこに行がきちつと前提されてるわけで、摩訶止観等の明鏡は、四種三昧が大前提ですから、お題目唱えるばかりではなく、いろいろな場面で自己コントロールできるわけで、日蓮聖人はそういうふうにおっしゃっている。

で、今ちょっと私、寝不足で頭ぼうつとしてるんですが、この三日にハワイから帰ってきました。サーフィンやりに行ったわけじゃないんですが、たまたま向こうのお寺で、「もう異種文化の中で、さらに移民のメンバーも、日系三世、四世の時代で節分会にご祈禱しても人が集まらない。唱題行もだめだ。どうするの?」「じゃ私がやりましょう」という話になって、あちらで瞑想のワンデーセミナー、一日開いたのです。

欧米では仏教といえば「瞑想」です。止観の修行、四種三昧の大前提は常坐三昧ですから、簡単に言えば普通の瞑想をベースにして、外国人に、「瞑想はこんなふうに使用があつていいよ」と話しながら、同時通訳入れてですけども。少しパワーポイントでいろんなものを見せてながら話し、そしたら、その気になって、夕方小一時間、唱題行をしました。ハワイの檀家さんではなく、ネイティブの普通の白人が、東洋の唱題行「マントラ・チャントイング」に、大変興味を持った。

日本社会でも今、そういったところをわれわれ宗教家に対して求めているように、私は思うのです。ぜひ、この異種文化、今、日本の社会も、お葬式、法事うんぬんっていうことも、異種文化みたいなものです。自分たちがやっぱりそういう体験的なものによって、社会に伝えていく具体的な作業が最も大事なというのが、私の申し上げたいことです。以上です。

司会 ありがとうございます。

シンポジストの方には、「お一人十分程度で発題をしてください」とお願いをしております。
では、赤堀上人、次にお願いをいたします。

赤堀 よろしくお願いをいたします。

まず、時代と宗教を論じるには、自らの立ち位置を定めなければ、その視点は不確実なものであります。仏法と世法の関係を信仰的立場から把握しようとするならば、七層の重層が考えられます。この点を無視しますと、論点がずれて、そして無意味なものになると考えられるからです。

まず、一番上から見ていきますと、日蓮仏教信仰者の立場。第二層は、日蓮宗としての立場。三層めは、門下連合としての立場。四層めは、法華系教団としての立場。五層めは、仏教教団としての立場。六層めは、世界諸宗教としての立場。七層めは、人類全体としての立場と、こういう七層からなる形で、どの位置でものを考えるかということ
です。

これを教学用語をもって言うならば、四悉檀に配当されるところであります。この四悉檀と五義判、ことに序判の教法流布の前後に留意した上で、現代と宗教は論ずべきであるというのが、今日の初めの提言であります。その上で、今日は、現在における日蓮仏教の一信仰者としての立場から、「宗教のリアリティ」と題しまして、一言提言いたします。

私は、宗学というのは、日蓮聖人の教義を後人が受け止め学ぶことと理解しております。そういう中で、最近言われていることは、一つは「追体験」です。

いわゆる追体験というのは、信仰する個人が信仰に至るリアリティを問うものではなくて、日蓮聖人のようにという立場も、信仰者の心のありようと、われわれと聖人との対峙を求めるものではありません。宗学というのは、教学

を信仰者が色読し、内在化した上で語るものというのが、私の論であります。これは本尊抄の中に、「五百億塵点、元始の師弟のありように遡源帰納し、所化の同体をもって成仏」とされている大聖人の立場からも、推量されるところであります。

日蓮聖人の「事の法門」の「事」というのは、事実、具体的という意味も含めて、リアリティ、と考えてよいのではないかと思います。「立正安国をもつて真の事の一念三千」とされてるのは、三類の強敵と法華經の証明者がアジアを舞台に展開したことにより、人々がそれに着眼、瞠目した事実を指しています。

深草の元政上人は、病弱であったにもかかわらず老母を負いて身延山に登詣され、母堂の死をもって、死すること願われました。元政庵の釈尊像は、布で五臓六腑を作り納められております。どれほど元政上人が釈尊を身近に、生きる釈迦牟尼仏として接せられていたか、思い知らされます。老母を負って、峻谷深山に登詣したのも、母を負うその重みに釈尊と宗祖を感じるというところに気持ち置かれていたのではないかと思います。持律し、歌を詠み、詞を作るのも、「即身成仏万法是師」と看破した師にとって、同じように宗学のリアリティを感じ表す当然の行為だったと思われれます。

幕末、優陀那日輝上人の師であります本妙日臨律師が托鉢してましたときに、布施する人もなく、一羽のガラスが来て、「本妙さん、本妙さん。乞食などしないでも、いくらでもお米が落ちていますよ」と。そういうつぶやきに赴いたところ、農夫の荷車の米俵から米粒がこぼれ落ちていたという話が伝えられています。

また、村の少女が、友達がいなくて一人寂しくしているとき、律師は雀を招いて、少女の手に止ませ遊ばせたことも伝えられています。ここには、鳥獣と心が通じる十界互具の体現があり、アッシジの聖フランチェスコに比べて劣ることのない、聖者としての一面が見られるわけです。

文政五年頃の最誠師宛の書簡にこうあります。「剣法を学ぶ者に其伝書のみ見ておる者は真の敵に向かいて、物の

用に立ち難し。仏者の書物ばかりを見る者は、剣法の伝書を見ると同じことに候。故に学者と称する者、ただ数百巻を読みたるばかりにて、我慢偏執は生まれたるままなる者多きをもって、お考えあるべく候。しかれば、万事の上について深く観破すること、「実行と申すべく候。昨夜、託事の三千観を觀し候」。託事の三千観っていうのは、天台の三種の止観の一つですね。

で、余禄なんですが、律師が、事観自問随という七十七か条を上げて、自ら七十七の自問の問いを立てて、それに答えていく、学問の仕方をされております。

ちなみに、第一問は、「如何が是本門行者の真正發菩提心」です。この「真正發菩提心」は、摩訶止観の一番初めのところに出てくる言葉ですが、こうした形で宗学というものをとらえていらっしやいました。

私は十九歳のとき、性愛の悩みによって仏法を求めるとに至り、煩惱即菩提の仏説によって、一種の解脱を得ました。釈尊の悟りが私を変え、変わった私の営為は、現実の事象の中で同業の他者と出会い、その苦悩を除こうと、利他の思いをなし、業をたたしめ、相照らし、相縛脱したところにあります。ここに私の宗学のリァリテイがあります。

こうした観点から、私の論じているところの一端を挙げれば、一つは、「殺を以て利他の法門と為す」、これは宅間守、大阪無差別児童殺傷事件を取り扱ったものです。それから、「記憶を失う人」。これは現在、六、七名に一人、躁鬱の傾向があるということに関して、五百億塵点の記憶ということと結びつけて論じております。

それから、「マインドフルネスと十境十乗観」。マインドフルネスというのは、最近非常に、禅から出て、一つの行為、あるいは部分に意識を集中させるという形で、かなりの企業、IT企業関係に取り入れられている修行方法です。それと、十境十乗ということを結びつけて考えるということです。

そして、「アナと雪の女王とインナーチャイルド」ですね。これは現代の社会の女性が、自由に解放されたいというところ、あの物語の核心である心の解放、そして、今の社会の中からの自由ということをあわせて、インナーチ

ヤイルドを論じたものです。こういう視点から、宗学のリアリティというものを考えております。

最後に常不軽寺には、ガンダーラの釈尊像を奉安しております。これは古民家の土間を本堂にしております。これはお寺として作ったんですけれども、他のお寺の模倣ではなく、立派な建物でもなく、私の宗教のリアリティに合うお堂を造り、そこに合う釈尊像をお祀りする。その意味で、私の寺は私自身のリアリティから生まれたのであるという事を申し上げ、提言とさせていただきます。ありがとうございます。

司会 赤堀上人、ありがとうございます。では、引き続きまして、大西上人、お願いをいたします。

大西 大西でございます。ちょっと風邪を引いてますので、声がちょっとお聞きにくいと思いますが、ご容赦ください。今、赤堀先生と竹内先生に囲まれて、もう死ぬ思いをしております。ちょっとレベルダウンしたお話をさせていただきます。

もう七、八年前ですけども、今、身延山の学長をしております浜島先生から電話があつて、そのとき、浜島先生は伝道部の課長をしておられました。今度、日蓮宗で宗門運動を立ち上げると。で、名前だけは決まると。名前は、「立正安国・お題目結縁運動」なんだと。名前は決まってるけども、内容はまだ決まてないという面白い話をされました。浜島先生が、「各宗派の本山、本部は京都に集中してるから、悪いけど、ちょっとおまえ、車出してくれ」ということで、私が運転手になって、浜島先生と、それから富川さんと三人で各御本山を回って、各御本山の宗門運動についての事前調査をしたわけです。

東本願寺、西本願寺、それから知恩院と。知恩院なんかは、おてつぎ運動ということをも、何年もされていきます。そして、最後に比叡山延暦寺に行きますと、一隅を照らす運動ということで、これも何十年と、そういう運動をされ

ております。

この日蓮宗の宗門運動を、どういう絵を描くのかということが、まだ皆さんの頭の中に固まっています。ですから、ともかく各宗派の御本山、本部を回りまして、それぞれの資料を頂いて、宗門運動に関する調査をしたわけです。

あらかた京都周辺の本部、本山を回りまして、一日……半日ですね、ちょっと時間が取れたわけですね。そこで、浜島先生が、「そうだ、そうだ。キリスト教も行ってみよう」ということで、京都の三条河原町というところに、大きなカソリックの教会がございます。その教会に前の日にお電話して、「実は日蓮宗の者ですけども、カソリックのやっておられるご宗門の運動についてお聞きしたい」ということで、カソリックの教会にいったわけです。

そこで、我々の相手をしてくださったのが、ジェームス・ハヤット神父と。もう八十なんぼのおじいさんでした。近畿が一番偉い方だそうです。そのジェームス・ハヤット神父が我々の相手をしてくださいます、ハヤットさんの行った宗門の運動というものを、我々は聞きました。

ハヤット神父は三十代のときに日本に渡ってきて、そこで何をしたらいいか分からなかったんですね。そこで、ともかくマスメディアを利用しようということ、当時、京都放送といっていました、今はKBSといえます。その京都放送のところに行つて、「朝の十分間、時間をくれ」ということで、月曜日から土曜日ですかね、金曜日かもしれせん。ともかく時間をくださいという交渉をして、「光のともしび」という時間枠を取ったわけですね。

そこでハヤット神父は何をされたかという、たどたどしい覚えたばかりの日本語で、ともかく聖書を読むと。ともかく聖書を読むという時間を、毎日行われたわけです。それがもう何十年と続いているんです。河内桃子さんという女優さんがおられました。その河内桃子さんのナレーションで、その、「心のともしび」という時間は始まるんです。「暗いと不平を言っているよりも、進んで光をとみましょう。心のともしび」と、そういうフレーズで始まる

時間です。そこでハヤット神父が五分、十分、ともかく聖書を読まれるんです。それをもう延々と何十年やっておられてきたわけです。「それが私の宗門運動です」ということでした。

そこで、いろんな話をお伺いしまして、私が長年キリスト教に対する疑問があったんですね。それをちょっと、失礼ですけども、お聞きしたんです。キリスト教というのは、日本においては、長崎とか九州の一部を除いては、私はそんなに布教に成功してるとは思わなかったんですね。しかし、バレンタインデーやクリスマススイブになると、日本中の若者が全員クリスマスチャンになってしまふと。それから、もう結婚式の八割、九割がキリスト教の結婚式なんです。そういう状況をかながみて、当の神父さんは、キリスト教が日本において布教に成功したか失敗したか、どう思っておられるんだろうかということをお聞きしました。

すると、ハヤット神父はこうおっしゃいました。「キリスト教が日本に上陸したのは、フランシスコ・ザビエルさんが九州に上陸されてから、布教を始められて、七万人の信者を獲得した」と。「しかし、その後は、キリスト教は徹底的に異端視されて弾圧を受けたんです」と。「ですから、キリスト教は江戸時代、延々と禁教にされて、キリスト教の布教を許されたのは、明治維新になってからです」と。「ですから、これが日本においてキリスト教が発展しなかった公式の理由です」とおっしゃった。

そこで、「公式の理由」という言い方をされたのが、ちょっと私、不思議に思いました、「じゃあ、ハヤット神父は、そういう理由でキリスト教が日本において芳しい成果を上げてるとは思っておられないんですね」と聞きました。

するとハヤット神父はうなずいて、こうおっしゃいました。「キリスト教が世界において、布教の最初に弾圧を受けるのは当たり前のことです」と。「ローマ帝国においてもそうですし、どこの国においてもキリスト教は最初弾圧を受けます」と。「その弾圧が布教のじゃまになってるといいうのは、理由になりません」と。「日本において、布教にあまり成功しなかったのは、それは特殊なことです」と。「日本人の心の奥にある特殊なものの考え方、それがキリ

スト教の布教を邪魔したんです」とおっしゃった。

そこで私は、「その日本人の心根の中にある特殊なもののお考え方というのは、一体何ですか」と聞きました。すると、ハヤット神父は、「それは、日本のお坊さんには絶対話すわけにはいきません」と言われた。しかし私は、「それでも何とか教えてください」とお願いしたら、笑いながら、こうおっしゃったんです。「日本人の心の奥にある先祖崇拜の思想、この先祖崇拜の思想がキリスト教の布教をじゃましてきたんです」と。「この先祖崇拜の思想は、世界的にも珍しいもののお考え方です」と。「キリスト教とは相入れない考え方なのです」と。「だから、キリスト教の布教は成功しなかったんだと思います」と。

「そして、大西先生の最初の質問に戻りますと、今の若者は、キリスト教にとってどういうもののお考え方をするか」と。「例えばですよ、クリスマスイブというのは、クリスマスチャンにとつて一番聖なる日です」と。「その聖なる日に日本の若者は一体何をするか」と。「日本の若者は、自分の恋人と語らって、高級ホテルの一室を無理を借り切って、そこで一晚を過ごすという、これが日本人のキリスト教への考え方なんです」と。「それから、結婚式において、どんな神様か、どんな教えかも知らないのに、あの格好をしたとか、ライスシャワーを浴びたいとか言つて、キリスト教の結婚式をします」と、「これはキリスト教に対する冒瀆だと思っんです」と。「これは何も私は宗教の話をしてるんじゃないんです」と。「宗教のもっとも手前にある道徳の話をしてるんです」と。「どうか、日蓮宗で宗門挙げての運動を十年間にわたって展開されるならば、そのところを何とかしてください」と。「私達には手が届かないところも、あなたたち日本の仏教者ならば手が届くんです」と。「だから、そういう心根を動かす宗門の運動をしてください」と、ハツパをかけられました。

そして、我々が今、迎えてる時代は三離れの時代。葬式離れ、墓離れ、寺離れと言われている時代です。これはどういふ時代かと言いますと、檀家制度が実体的に崩壊していつてる過程なんです。檀家制度が実体的に崩壊していつ

てる。街からガソリンスタンドが消えました。酒屋さんが消えました。必要のないものはあつという間に消えて、形を変えてしまふんです。

だから、私達のお寺も、私達の生活も、ことによつたら音も立てずに消えてしまふかもしれません。そういうところで起こった宗門運動なんですよ。立正安国・お題目結縁運動という宗門運動。非常にタイムリーなタイムリーな宗門運動なんです。

しかし残念ながら、立正安国・お題目結縁運動という、こういう宗門運動の固有名詞さえも、もう語られなくなりました。単に、宗門運動、宗門運動ということになって、何でもかんでも宗門運動。それから、合掌礼をはやらそうということも、もう誰も本気で関わりなくなってきました。

あと、四、五年ございます。ここでもう一度我々が原点に戻って、立正安国・お題目結縁運動を展開しないと、この日本から日蓮宗の道場が消えてしまいます。他宗が消えるのは大歓迎ですよ。しかし、日蓮宗お題目の道場が消えてしまうというのは、決して許されないことだと思えます。どうか、もう一度立正安国・お題目結縁運動の原点に戻って、日本人の心根を動かす、そういう運動を展開していきたいと思えます。以上です。

司会 大西上人、ありがとうございます。では、続きまして、竹内上人、お願いをいたします。

竹内 本日はお招きいただきまして、幸せでございます。与えられた時間の中でお話をさせていただきます。お配りいたしました資料が、「紙一枚だけに限ります」という条件でしたので、表と裏に印刷させていただきました。

ここで、グローバリゼーションとかですね、皆さん、新聞、テレビ等でお目にかかる言葉なんですけども。これは結局、これから先の人類社会が、これまでのような安穏とした、安閑とした精神状態では生き残ることはできない、

苛酷な厳しい現実を説明する言葉であります。

で、一番上から、段落で言いますと、五番めなんですけれど、三つに分けて説明いたしました。宗教、民族の対立化がですね、とどまるところなく、これが広がっていく。深刻さが増すほど深くなると、貧富格差の拡大化を止めることは、絶対にできなくなります。そして、文化と文明の画一化をしはじめる。

で、こういう困難な状態の中で、宗教はどんな役割を果たすかということを、宗教者が考えなければいけないと、私は思っておるわけです。

なぜそうかと言いますと、実は世間の人はですね、宗教者、宗教家に深く期待を寄せています。優れた資質、人間的な資質を持った人ほど、宗教者に期待が集まっているという事実があるわけです。宗教者同士はですね、このことをきちんと受け止めて、この問題に向き合うべきだと考えているわけです。

仏教では末法思想っていうのがありますけれども、まさに末法の時代を、絵に描いたものじゃなくて、現実のものとして、われわれは体験せざるをえない事態が、これから起きてくる。こういうことが、このグローバルゼーションという近代文明の末期に起きてくる社会現象でありまして。で、近代文明を超える学問を早く作らなきゃいけないということが、現代の知的なリーダー、学者といわれるアカデミズムな世界で生きている人びとの共通な最大命題なんです。

で、このこれからの時代が厳しいということで、私は宗教対話をこれまで学んできてまいりまして、宗教者として、どんな問題を自分の問題と特定すべきか、これが、まず一つあるわけです。それから、他のいろんな宗教者と出会うことで、自分自身の宗教人格といいますか自分の心の中の、「こうあるべきではないか。こうした方がいいんじゃないか」といったことをですね、検証する必要があるわけです。で、検証するということは、これは宗教者が宗教者を訪ねるといふことなんです。で、昔からそういうことはやってきてるわけです、宗教界ではですね。

で、私は、宗教対話というものを、最初は、必ずしも私はそのことを強く訴えたりはしてこなかったんですが、今、私の心の中にある思いはですね、宗教者が宗教者に出会うことでしか宗教者の育成はありえないと。例えば、日蓮宗の僧侶であるわれわれは、日蓮宗の先達をまず訪ねるべきであります。それから、異なる宗教の指導者としてりっばな方がおられると聞けば、そういう人とも私どもは面談を求めていくべきですね、これを宗教対話っていうんです。

対話と討論という二つのコミュニケーションの取り方があるわけです。対話っていうのは、ダイアログです。討論は、デイベートです。アメリカのですね、教育の最高学府は、このデイベートを徹底的に教えるんですね。因みに宗教では、仏教を含めておおむね対話が重んじられています。

で、この二つしか私どもは他人とコミュニケーションを取る方法は、他に持ってないんです。で、この対話と討論を、摂受と折伏に配当できるのではないかとという疑問を持つ方が、宗門には少なからずおられます。

で、私は、自分はささやかな研究しかできておりませんので、私個人の限界の中で私の印象を申し上げますと、これは本質が違ふと。撰折論、田中智学先生の撰折論を、私、学生の頃、しっかりと繰り返し読みまして。あの中に描かれている世界と、この対話、討論を議論する世界とは、もう格段の差があつて、もう全然範ちゅうのレベルが違ふということであります。ですから、そういう分け方は、私個人はあまり正しいとは思えないということなんです。

で、対話に就いて、簡単に言いますと、相手を肯定的に受け入れて、共感的関係を構築する。一貫して相手を肯定的に受け入れて共感的に関係を構築する。これが一番左ですが、その次はですね、相手の長所、優れたところを積極的に受け入れて容認する。そして次、相手への貢献の道を、相互に協力的に求める。自分が貢献する道を相互に求め、協力的にこれを進めるといふことです。

で、討論の方は、その反対になつてるんですね。相手を全否定的にとらえ、拒絶的な立場を貫き通す。相手への反論に終始し、欠点を徹底的に攻める。相手の欠点を攻める。で、自分の意見、立場だけを是認し、自己を正当化する。

この討論というのですね、皆さん、近代教育論の中で、これが理想的な姿であるとされてるんです。で、実際には、近代の学問に関わるということは、この討論をする人生になるんですね。

で、私は対話がよくしろうと思ってるわけです。で、詳しくは理由を説明する時間がありません、申し訳ありませんけれども。

で、この対話が必要かという理由があるんです。宗教共同体を作る必要があると、私は確信を持つわけであります。宗教共同体っていうのは、いろんな宗教共同体があるんです。日蓮宗は法華経、日蓮聖人を信仰する教師、僧侶で作った、これはサンガであります。で、これもやっぱり今申します、同じ宗教、教えを共有できる、宗教対話をする、そして、それを通して一味団結する。これも、いわゆる宗教共同体ということになるんです。

その宗教共同体のお話をちょっとさせていたきたいんです。で異宗教、他の宗教を信仰する人と、自分の宗教は違う、その関係の中で共同体を作る。これも共同体なんです。つまり、同じ教えを信仰している者の共同体と、異なる教え、異なる宗教を信仰する者の共同体があるっていうことです。これが共同体の理解なんです。

なぜ宗教共同体が大事かと言いますとですね、実はこの後、人類はどうなるかということの一つの、こんなことが実際に起きてくるという一つの子想があるんです。それは何かと言うと、人間が、人類が頼りにできるものが何であるかが分からなくなる。何を信じていいのか分からなくなる。いや、そのために宗教家がいるではないか。その宗教家がrippana道を指し示す、力のある方だけならいいんですが、そんな方が非常に少ないわけですね。

だからこそ対話が必要だと。自分が尊敬できる人との出会いを大切にして、そして徹底的に教えの、お互いの教えを研鑽して、相手と自分とで、私は日蓮宗ですから、日蓮聖人の教えを学ぶのに、他宗の教えが役に立つということなんです。そして、他の宗教を信奉する人と、私が日蓮聖人から、「これが日蓮聖人の教えであろう」と思うこととの間にですね、一体何が生まれてくるのか。異なるものの中から何が生まれてくるか、生まれてくるものがあること

において、尊敬できる人との対話が、私は人生で、生涯でとても大事だろうと思います。

で、私は外国の宗教とも接点を持つ必要があると考えまして、ドイツに大聖恩寺を作りまして、今年で十五年めになります。おかげさまでヨーロッパにはキリスト教がございますので、キリスト教との対話をずっと続けてまいりました。大変りっぱな僧侶の方に出会わせていただいて、何が分かったかと言いますと、日蓮教学は世界の最高級レベルの教義であると、私自身はそう確信させていただくことができたわけです。

で、私はそのとき、必ず問われたことにしか答えない、そしてお互いにそのルールを守りましょうということであるんですけれども。私も多くの方に問いをかけ、あちらから聞かれたことについて、「日蓮聖人はどうお答えになるんですか」という質問が出てくるから、私は日蓮聖人は、その方よりも少し学ばせていただいている期間が長いので、私をご説明申し上げると、皆さんは一樣に驚かれます。「これは大変な教えだ」。日蓮聖人の教えです。で、何を、どんなことを申し上げたときに、そうおっしゃるかと言いますとですね、この日蓮聖人の、この認識、問題をとらえる知的構造というものの深さと広さと、その構造の関係性がきわめて緻密であり、現代という時代に求められているものに、ほぼ答えることのできる条件を持っていると。

それは具体的に申しますと、他宗派と日蓮聖人との違いは、私はどこにあるのかなと考えますときにね、やはり、この比較検討、対照的にとらえるものをどう評価し、どう評価できないと判断するか。この比較対照ということに、非常にこだわる方がおられます。そして、このこだわりの中に大事な、知的な、限りなく進化できる、成長できる理由があると。そんなことを私は宗教対話を通じて学んだわけでありませう。

時間がまいりました。ちよつと過ぎたかもしれませんが、これぐらいにいたします。ご静聴ありがとうございます。

司会 竹内上人、ありがとうございます。

五人のシンポジストの方に、おのおのの大変特色のあるご発題を頂きました。そこで、五人の方々に、ご自分以外の四人の方の発題に対して、どのような感想を持たれたかということについて、今、竹内上人の言葉を使えば、対話的なコメントをぜひお願いをいたしたいと思います。

では、野坂上人から、よろしくお願いいたします。

野坂 まず、影山上人が、お話になったことについては、やっぱりお題目を唱えることは自己コントロールであり、私が申し上げた少欲知足というようなことを実現をしていく、本当に信仰心を自ら体すれば、その自己コントロールができるようになるし、それは少欲知足につながるのかな、などということを思いながら聞かせていただきました。

赤堀上人のお話については、お話の中では出てこなかったんですが、レジュメの中でですね、理由は、宗祖の亜流と化してしまったという、問題点を出されたと思うんです。日蓮聖人の日蓮聖人的認識ですね。さっき竹内上人もおっしゃったかと思いますが、そういう認識、追体験ですね。それをやっぱり、私達は欠かすことができないんじゃないかないか。こういう状況に対して、日蓮聖人だったら、何を思っただろう考えられるのか。そのことを確認することなしには、私達はやっぱり前に進むことはできないでしょう。そのためには、そうした日蓮聖人の追体験、「日蓮聖人のように」ということは、欠かすことのできないことではないのかなと思いました。

それから、大西上人については、立正安国という宗門運動ですね。この火を消してはならないでしょう。いつの間にか単なる普通名詞の宗門運動になってしまっていると。これは私も大変共感するところがございます。やっぱり立正安国という宗祖の、世界にも通じていく、「日蓮宗は立正安国があるからすごいよな」と、他宗派の方も実質認め

てるところもあります。この立正安国という理念、考え方を除いては日蓮聖人のお考えが成り立たない。立正安国そのものが、実は日蓮聖人の終生の課題であったし、それを私達も当然承知をして、踏み行っていくべきものなのかなというふうに思っ、受け止めさせていただきました。

それから、竹内上人については、私が先ほど、申し上げた、やっぱり曼荼羅の世界ですね。曼荼羅は、私は、実は曼荼羅の中にはキリスト教もイスラム教も、アラアの神もエホバの神も皆入っているというふうに思っているくらいです。法という、宇宙の摂理といたらないのか、ダルマがキリスト教的な出方をしたのがキリスト教。イスラム教的な出方をしたのがイスラム教、ユダヤ教的な出方をしたのがユダヤ教、あるいは神道的な出方をすれば日本神道みたいな形になっていくだろう。全体を統括できる考え方が、あの曼荼羅御本尊の中にあるということ、やっぱり竹内上人のお話を聞きながら、異宗教との共同体ですね、いわゆる、宗教共同体を作ることとは。まさに曼荼羅が指し示しているところではなかったのかなというふうに受け止めさせていただきました。以上です。

司会 ありがとうございます。では、続きまして、影山上人、お願いをいたします。

影山 私は、一番初めに申し上げたようにですね、人はその人の立場でものを考え、おしゃべりになって、発言なさっていらっやいますので、その立場に立って理解すれば、皆様方の発言に何かコメントを挟める状況にはないと思っております。

ただ私の立場は、今、その日本の社会の中で、われわれが立っている中で、一番大事な経済基盤が壊れている状況、葬儀法要対応型の寺院運営では寺院経済の危機が来るということ、まずそれをきちっとしないと、五千万年前の恐竜が、自分の口を賄えずに滅んだようにそういう時代が来ていると思う。

ですから、今、皆様方が社会に投げて、その返ってくるボールをどう考えていかなきゃいけないのか、というところで、コメントはさせていたがたいと思います、以上でございます。

司会 では、赤堀上人、お願いいたします。

赤堀 先ほど初めに申し上げましたように、その立ち位置が違ったものに関しては、難しいのですけれども、感じたところを申しあげます。

野坂上人の環境問題に対する提言は私も同様の認識をもっています。日蓮聖人はこの環境に関して、大地震、天災は諸天の怒りを表す警告として受け止めるべきものであります。こういう視点から、今回の東北の大震災に関して、日蓮宗からはコメントが皆無であります。あまりにも、ものをきれいにとらえずで、人からの批判を恐れるあまりに、日蓮聖人のように考えなくなってしまうということを、おそれなくてはならないと考えます。

それから、影山上人のお話ですけども、体験を教学の中に入れて考える。これは、教学と教化学を二本立てにするか、あるいは教化学も教学の中に組み入れるか。又、宗学者の中には、教化学などは全く必要ないと言う方もおります。

私は、やはり宗学が、体験や教化を内包するものでなければ、宗学はありえない。時代に適応しないということよりも、意味をなさないというのが、私の提言したところでもあり、共感されることです。一種、日蓮宗で行われている湯川式唱題行を含めて、この止観ないし禅定を行法に取り入れるということに関しては、教義的にいかなるものでしょうか。日蓮宗は、「六波羅蜜、自然在前」。禅定はすでに題目の中に自然に備わるとおっしゃっている以上は、別立てして、日蓮宗の正式な行法としてそれを入れるかということ、一考を要するところではないかと考えます。

それから、大西上人に關しましては、トーマス・ルックマンが、「現在は見えない宗教の時代である」と。

ただ、これはグローバルの中では、避けて通れないですね、必然的な結果であります。寺に出来ない。教会に出来ない。フランスではかなり日曜礼拝の数も、それこそ十%内外にとどまると言われています。ただし、見えないけれども、個人の内的には信仰を求める気持ちは高まっているとも、言われています。

私は日蓮宗のコラムに、教団の衰亡というのを書きまして。堺屋太一さんの論を引きまして、現在の日蓮宗は総花的、内的評価優先など、五項目ほど宗門の衰退していく理由を挙げましたけれど、大西上人の言ったように、宗門運動が何のために何を目的として、どこで誰がやるのか、全く分からない。これから考えて教化学を一つの確立したものととして、打ち出していくのも一つの方法かと思います。

竹内上人のお話は、数十年前から、宗論という形で始められまして。それから、それを内包する形で、宗教間対話というふうに変遷してきてると、私は受け止めております。

竹内上人の言う対話の推進は、日蓮宗として、世界諸宗教あるいは仏教教団、門下連合に対して積極的に働きかける必要がありますね。

法華系教団が団結できないで世界の諸宗教と、対話は難しい。そういう意味で、法華系教団の対話を私も試みましたが、竹内上人が大きな立場から取組んでくださって、非常に心強いところがあります。

ただし、宗門内においては、討論すらないというのが、私の見て取るところであります。まともに教学を喧々諤々と論じている姿を、私は見たことがないのです。現宗研でもそうじゃないですか。自分が信じることを主張して戦わせるというところに、私は真実の対話が生まれると思っています。

シンフォニーという言葉がありますが、これは闘争と同時に調和をもたらすという意味があるそうです。それぞれの演奏者が、それぞれの個性を活かして、それぞれの最大限の音を鳴らすところに真の調和があると言われているそ

うです。

ちなみに、日本人は一回めのリハーサルから音が合ってしまうというのがね、初めっから、けんかしない、仲良くやろうというところが目的のために、本来の持っている個性、持っている能力を発揮せずに終わってしまう。そこを経過して、この竹内上人のおっしゃっているところに入っていけたならば、非常に、優れた宗門の未来像が描かれるのではないかと思っております。

ちよっと時間が経過しましたがけれども、失礼いたしました。

司会 赤堀上人、ありがとうございます。では、続いて大西上人、お願いをいたします。

大西 私が宗門運動というものをテーマにしたのは、この宗門運動のまさに渦中において、シンポジウムをして、全く宗門運動に触れないでスルーしていくのはいけないと思ったんですね。

ですから、例えば野坂先生の話にしたって、それはもうそれで十分でございます。しかし、この立正安国・お題目結縁運動という宗門運動を、どうとらまえておられるのかなと。おそらく、「もうやつても無駄なんだな」と思っておられるか、どうなのかという問題。

それから、影山先生を、もう影山先生のやつておられるワールドがごじますからね。それに対して、何ら口挟むことはございませんけども。ちよっと赤堀先生は、ちよっと答えていただけましたけれども、この、いわゆる我々の属している日蓮宗を、どうするのかという話ですね。

それから、竹内先生のおっしゃっている宗教者の対話というのは、竹内先生レベルの話としては分かるんですけども、私どもがさせていただける対話というのは、どういう対話があるのかなと、そういうこともお聞きしたいと思います

ます。

何かこの立正安国・お題目結縁運動が、日蓮宗の運動ではなくて、単にもう伝道部の一部でやってる運動に成り下がってしまうのを、それからゼロは何人集まってもゼロであるという、一は百人集まれば百だけど、ゼロは何人集まってもゼロであると、こういうことにもものすごく、私、危惧しております。

司会 ありがとうございます。では、最後になりましたが、竹内上人、お願いいたします。

竹内 私はさつきですね、時間がなくてちよつと言ひ漏らした大事なことがあります、それは皆さん、恐縮ですが、私が書きました物の、二枚めの物を見ていただきましたんですが。

これですね、「対話が必要です」ということなんです。それは、対話をやると、宗教共同体を作る運動に簡単に入っていけるからです。

いろんな宗教の異なる人がメンバーになりますと、「キリスト教の教えはどんな教えなんですか。ぜひ教えてもらいたい」と。仏教の我々は自然にそういうふうをお願いすることになります。すると向こうは、「いやいや、私は仏教の教えに興味がある。私は仏教の教えを逆に学ばせてもらいたい」と、必ずそうおっしゃる。

そしたら、後か先は別にして、「私は仏教だから、仏教の話を聞いてください。あなたはキリスト教だから、キリスト教の神学が一番大事なところから教えてください」と。こういう注文をつけて、お互いに自分の経験を、体験、学んだこと、すべて隠さず、きちつとこう教える、教え合うっていうか。

それが何で必要か。それをやると、宗教共同体が全世界に広がっていくんですね。全世界に広がった宗教共同体がなぜ必要かと言うと、公共財産を守るのは宗教共同体にしか守れないという、そういう価値観が宗教共同体の中から

出てくるんです。

この全人類が持っている財産、貴重財産は、政府や政治や学問では絶対に維持できないんです。守れないんですね。それがどんどん破壊されていく時代なんです。そこで、宗教家が宗教共同体を作って、公共財を守るための活動を本気でやっていかなきやいけない。

これがですね、一九六九年（昭和四十四年）八月二十日（二十二日）、日本で宗教共同体を作るということを、最初におっしゃった方は藤井日静法主だったんです。そのご決断に新興宗教は、当時の、創価学会は別でしたけど、佼成会を筆頭に、「やりましょう」と。「そのお手伝いを私達がさせていただきます」と申し出られたんです。この様な世界連邦第一回国際会議は、身延山で行われたんですよ。そのときに立正佼成会の会長は、法主猊下の強い信念と確信をお聞きになって、「これは素晴らしい」と、「私どもは海外との宗教界との交流があります。だから経験がある。身延山に必要な人間を出しましょう」と、その若い世代の代表で出てこられたのが、今の会長さんなんです。

あの各教団全部、創価学会を除く各教団、ほとんど大きな教団はこれに参画されたのです。受付のしかたが分からない。ご招待状を出す出し方が分からない。しかし、彼らが知ってたわけです。身延山は多くのことを彼らから学ぶことができたわけですね。で、武見太郎という、当時日本を代表するインテリの一人がですね、このことをものすごく感動的にご挨拶をしてるんです。

司会 はい。他の四人のコメントの方に対する対話的なコメントをお願いできないでしょうか。

竹内 はい簡単に申します。まず皆様のお話をお聞きしまして、野坂上人のお話を私お聞きして、非常に重要なことをご指摘になったと、そう受け止めさせていただきました。その四大菩薩が具体的な現代の概念で翻訳されていたと

いうところは、素晴らしいと思います。野坂上人の場合は、そういう印象です。

影山上人様の場合ですね、自己人格、自己という概念に着目しなければ宗教は自分のものにならないと、こういう立場からのご説明でございました。これは世界の宗教はすべて自己人格に迫っていくという、その大きな共通な課題があることを前提にお話しになりました。これは世界で、大変これは普遍性のあるテーマのお話をご提案されたと思います。

で、赤堀上人はですね、私は学生の頃から親しくしてもらって、この教義の深さというか、この信仰の洞察っていうようなところで、大変ご研鑽が深いわけでありまして。いくつかの基軸を使われて、内容を精査に分けて、時間があれば素晴らしいお話になったと思います。

司会 はい、ありがとうございます。それぞれのシンポジストの方から、ご自身以外のシンポジストの方の発題に対するコメントをちゅうだいたしたのでございますが、今度はそれを受けられまして、ご自身のご発題に対する、他のシンポジストの方々からのコメントをどう受け止められるか。あるいは、補ってお話になることがあるかということ、お願いできますでしょうか。

大変恐縮ですが、一応お一人四分ずつとさせて頂きます。野坂上人からお願いたします。

野坂 影山上人については、特に私の申し上げたことについて、特別なコメントがございませんでしたので、私としては特にありません。

それから、赤堀上人については、ちょっとお聞き違いをしたかもしれないと思うのは、寛大とか巨大だっというふうに受け止められたかもしれませんが、「地球環境が私達の欲望をどこまでもどこまでも受け止めてくれるほど、巨大でもなければ寛大でもない」というような意味で申し上げたかと思えます。

それから、これは大西上人からちよつと課題を頂いたように思うんですが、私は宗門運動をどう思うのかと。いや、宗門運動、立正安国・お題目結縁というのには素晴らしいことで、誰にもこれを異を唱える人はいないし、そのとおりでと思いますが、それをもう一つ展開をして、「いのちに合掌」というようなスローガンを掲げた。ここは、私ほとても買えると思つてます。

いろんな意味で命がとてかけがえない。そのそれぞれの命が非常に軽くなつてきています。人質がかってに殺されちやつたり、またいろんな意味で、その関連の国では、報復的な意味で、あつという間に死刑に処せられました。もろもろ含めて、命が非常に軽くなつてきてる。命というものは三十八億年かけてそれぞれに現在に受け継がれてきて、人間の業ではない、すごい、ある意味では神業です。

生命工学の先生に言わせれば、我々の、DNAという生命の設計図ですね、これを描いたのは誰か？ それを読み取れるようになったのもたいしたものだけれども、これを描いた人は誰なのかということになると、生命工学の先生方は、生命三十八億年の恵みとか、自然の恵みとかいう、もうちよつと踏み込んで、サムシング・グレートだ、偉大なる何者かだと言っています。

ある生命工学の先生は、更に踏み込んで、「これは多分宗教者であれば、神仏のお計らいだと、こういうふうな言に違いない」なんていうコメントまで出てるくらいですので、やっぱり、「いのちに合掌」。です

で、法華経の中心の如来寿命品は、仏様のいのち、それは即我々の命でもあると思うんですけど、その命についての記述です。非常にかけがえない、誰にもとつてかわることのできないすごいものです。そのことをやはり認識するということでは、確かにそのことをしっかりと踏まえた上で、「いのちに合掌」ということを推し進めていくというの、いい運動だと思つております。

ただ、あとは教師の方々が、それをちゃんと受け止めて、今の人たちにきちつと伝えて、その趣旨というものを徹

底して、だからそれぞれに合掌礼をするんだといったような明確な論拠というものをしっかりと出していけば、宗門運動はまだまだ何とかなるんじゃないかと思っております。

常任布教師などという立場も与えられておりますので、そういうふうな期待を持ってやらなければ受けれないところでもあります。そんなふうな期待を持ちながら、私なりにその考え方を広めていきたいと思っております。

竹内上人は、特に私がお答えしなきゃいけないようなコメントではなかったかと思しますので、あえて竹内上人のコメントにはコメントしなくてもいいのかなと思います。

司会 はい、ありがとうございます。では、影山上人、お願いいたします。

影山 続けて、先ほどの立場の話になりますが、例えば、この宗務院の中で勸学院の先生方が、ここで勸学院の会議を開けば、日蓮宗の私たちが学校で習ったような教学的な答えが出て、この中ではまとまって、「よかった、よかった」という話になるのですが、外の社会の目で見ると、「一体これで勸学院の教学的なことだけでいいのかな」、内ではいいけども、外にどう対応するかが出てこない。

私という立場というのはそこだと思っております。その人がしゃべって発信してる場所がどこにあるのかと。今、一般の社会の中では、隣の部屋で何かお経の音が聞こえていると、近所の人は、「ねえ、ねえ。あの人が何か信心・信仰してるみたいよ」って、言う声が聞こえるんですね。これ、本来、宗教つてのはありがたいはずのものが、なんかちょっと異質に見られてる状況です。普通の社会の中で、「日蓮聖人が」という言葉を使った瞬間に、人間関係、崩れることがある。

そのためにはもっと一般的に、社会にどういうリアリティのあるボールが投げられるかというところで、その自分

の価値観といえますか、感じ方といえますか、外に対応してるかどうか、非常に問題なのです。

ですから、日蓮宗の教学的な言葉、たとえば「法華最第一」など良いフレーズの言葉がありますが、自分たちの内では納得できるのですが、外はさにあらずというところがあります。一回自分のリアリティを外が持つてるリアリティで、現代語訳といえますか、宗教というのは観念ではなく、具体的に体験の世界のことですから、どうしても自身が、自分で「うん」というものを、その内から持つてこなきゃいけないわけです。

やっぱり一般の方々と話するとき、一般の方々の概念で会話ができるように、私はあえて教学的な言語を使わずに、少なくとも一般社会では、今、科学といえますか、行動科学的、また心理学的な用語を使って宗教を語っていく、そこが、私は教化学ではないかと、そんなふうに思っています。

外のリアリティを、いかに、この教学といえますか、宗教の言葉につなげていくか。ですから、電気のコードが「三つまた」であれば、三つを「二また」につなげていく作業をしなければいけないわけです。「二またで、このプラグに電気入れろ」って言うてもですね、現在が三つだったら、それ三つにできるように、途中、アダプターを作っていかなきゃいけない。

ですから、私が言ってることは、理屈、教学とか、そういうことではなく、いかにその日蓮聖人の素晴らしいものに自分がつながっていくかと。そのつながっていくためのツールが、実は教化学であり、主体化ではないかなというところで、皆様方の、他四名の方々の考え方と違う部分はその部分かなと。そういうふうに、ちょっと自己主張させていただきます。

司会 ありがとうございます。また影山流のお答えを頂いたんだと思います。

では、赤堀上人、お願いいたします。

赤堀 模倣することと学ぶことは同じではないというのが、私の考えです。小林秀雄が、『信ずることと知ること』、DVDをお聞きいただくと参考になるんですが、面白いことをおっしゃってるんです。

「信じるものは、僕が信ずるのであって、諸君の信ずることとは違うのです」と言うんですね。「信ずることとは責任を取ることです。イデオロギーは常に匿名です。責任を取りません。本居宣長を読んでいると、彼は物知り人というものを実に嫌っている」という文章があるんですね。

意味深長ですね。ここで、小林秀雄が言ってるのは、「信ずることとは、自分が信じるのであって、それには責任が伴う」ということです。法華経を信じるというのも、自分が個人的体験としてそれを受け入れることに他なりません。信ずるに足るものを見いだし、受け入れる心持ちを信ずる心と言っているのではないのでしょうか。

宗学のリアリティということを提言しましたのも、教義と切り結ぶ個人の信ずる心に宗学が存在すると考えるからであります。この信じようとするもの、信じたものとの間に起きる現象をとらえることが、宗学、あるいは教化学の成立には欠かせないものであると考えられます。

これを私は、今日、宗学のリアリティと呼んで提言させていただいたわけであります。以上です。

司会 はい、ありがとうございます。大西上人、よろしくお願いいたします。

大西 この宗門運動が、最初は対外的な対社会的な運動として、但行唱題、我々はお題目を唱えればいいんだということ、もう但行礼拝とね、わざと礼拝にしまって、お題目をなくしてしもうたんやね。それで、但行礼拝運動を始めた。しかし、これはなぜかと言うたら、いまだお題目に結縁のない人にも広めていこうという望みをもって始めた運動なんですよ。

それが、今ではね、「御降誕八百年に向かつて」という言い方をするんですよ。「御降誕って言うたら誰のことや」と言うたら、日蓮聖人のことなんですよ。だから、対社会的、未信徒に対して、始まった運動が、もう御降誕八百年というところに、収斂していつちやうわけやね。この矛盾に気づいてほしいと思います。本当にもう御降誕八百年となったら、もう建物を建てるのか、そういう発想しなくなるんですよ。

だから、立正安国・お題目結縁運動として始まった運動が、もうその立正安国・お題目結縁運動という名前さえもなくなってしまうって、御降誕八百年というエンディングを迎えると。この論理の奇天烈さね。それにもうちよつと恐怖してほしいと思います。

それから、ちよつとさっきのジェームス・ハヤット神父との会話の中で、私に分かんかったことがあるんです。それは何かと言うと、「今後、日本の宗教はどうなっていくでしょうね」というような、私、質問をしたんです。するとハヤット神父は、「イスラム教が増えてきますね」とおっしゃったんです。私、その意味が全くいまだに分らない。これ、もし、ちよつと時間があれば、諸先生方にお答えを頂きたいんですけども。「今後、イスラム教が増えてきそうですよね」という、キリスト教のハヤット神父の危惧ですね。これちよつと何か、もし何かお時間があつたら、お願いします。以上です。

司会 はい。竹内上人、お願いいたします。

竹内 野坂上人のお話からですけれども。先ほども、気がついたことは申し上げたつもりなんですが、人間のその一つの存在として、自分自身の問題と、そして自分がその生存を許されている環境という、広い社会的な問題と、この二つのテーマがですね、常にリンクしていて、そして、その自己に問うと、自分自身に問いかけるといことが、や

っぱりベースに必要なところを説明されてると思えました。

で、影山上人ですが、やはり、訴える内容の検証といえますか、その現実というものがそこになけりゃいけない。で、生活というものがあつたり、それから、自分が避けては通れない、そういう事実を想定してお話しになっていた。だいたと思いました。

我々は、自分の問題は自分が一番知っているかのように解釈しますけど、そうじゃないということが、赤堀上人のさっきのお話の中に出てきましたが、非常に、肝心なものをすり替えちゃいけないと、影山上人のおっしゃったことはですね。内向きっていうことは、組織の中の親しい、そして親しみのある、そういう方面にばかり気を遣うというか、配慮するというか。それは親しい関係はいつそう親しくなるでしょうけれども、そこに肝心な、誰にも必要な、誰もが失ってはならない、よりもっと大事なことをきちんと追求していくべきだという、そういうですね、言葉は優しい、柔らかいお言葉でしたけども、これは考えてみると、非常に厳しいことを指摘されているんですね。そういうお話を聞かされて、我々は元気が出るというか、勇気を与えてもらえるんだと思いますが、そこは私の、非常に納得のいったところでございます。

で、赤堀上人はですね、これはまた非常に面白いことをご指摘になっているわけです。評論家の小林秀雄という人は、日本を代表する知的リーダーの中の、さらに知性の最高を行く人だと。日本ではもう絶対的な信頼のある方ですから、その人がこういう言葉で、自分の価値観をお話しになってたっていうことは、私にとっては非常にありがたい、大事なことを教えていただいたという印象です。

で、大西上人、最後におっしゃっていただいたんですが、信じるに足るものを受け入れて、そして信じるものを信じて。で、対象となるもの、宗教なら本尊と自分自身との一体化が、非常に大事だと。但行礼拝は大事だけでも、その前提に一つ大事なものがあるのではないかというお話は、非常に、宗門というものを考えたときには、一人、自

分個人をテーマに考えるのではダメですから、その意味が多分あったと思うんですが、非常に適切な指摘をしていたのだと、そんな印象でございます。以上です。

司会 ありがとうございます。

残り時間が十五分になってしまいました。冒頭、「この五名の方に集まっていただけなのは、奇跡的なことだ」というようなことを申し上げたんでございますけれども、この五人のシンポジストの方は、皆さん、長く深く、ずっと三原所長とおつきあいを持ってこられた方でございまして、世代的にも、ほぼ近いところにおいでの方々です。

「平成二十六年年度、現代宗教研究所の五十周年の年度の締めくくりに、この五人の方をお招きしてシンポジウムをやりたい。」所長からそういうご命令が下りまして、それで、この企画ということに至ったのでございます。

何しろもう申し上げるまでもないといえますか、十分にお分かりいただいておりますように、本当にそれぞれ独自の世界を確立してお持ちの方々ですので、面白い、興味深いお話が伺えるのは当然だと思いつながら、この五人の方の話をどう組み合わせられるだろうか、と考えました。で、「それは主任さんの腕だ」みたいなプレッシャーをです、打ち合わせ会の中で頂きまして、さて困ったなと……。

そこで、五人の方にそれぞれの発題について、それぞれコメントをしていただいて、そのコメントを受けて、ご自身でまたどうご議論を組み立てになるかというようにして、私は何もしないで、問題だけを振って、それで、それぞれの方に囁んでもらおう、組んでもらおうと考えました。これはうまい考えだと思つたのでございますが、なかなか私の思うとおりにはいかないということが改めて分かつたようなところでございます。

残り時間十三分でございます。それぞれおっしゃり足りなかつたことが、おありになるだろうと思います。本当は私がここで、何かトピックをつまんで、「この問題についてどうですか」とでシンポジストの方に振るという手順に

するという下相談になっていたんですが、それだけの時間的な余裕がなくなってしまいましたので、残りのお時間で、それぞれの言葉の結びといたしますか、まとめ、総括をしていただいて、シンポジウムを閉じさせていただければと思います。

フロアの方からご質問を頂いたりというようなこともしたいのですが、時間的な余裕がございません。お許しを頂きたいと存じます。

では、すみませんが、野坂上人から、言い残したことを、これだけは言っておきたいということ、二分でお願いをいたしたいと思います。

野坂 ここは池上でございますし、私自身は現在、本門寺の布教部の責任者をやっておりますので、池上に関わってお話します。日蓮聖人が身延から池上に来られて、そしてだいたい体調を崩されて、池上宗仲公のお館に入られて、しばし休息をされました。一時少し小康を保たれたといったようなところで、各地から日蓮聖人のご容体を氣遣って集まってこられたお弟子やご信徒の方々に前にして、それこそ、寄りかかりの柱がありますけれども、その柱に、おそらく寄りかかるようにして、最後のラストメッセージを寄せられた。

それが、実は、立正安国論についてのご講義だというふうに言われております。それは間違いないところだと思います。また立正安国論は、宿屋入道を通して、最明寺入道に提出して以来、折に触れて書き換えたり、少し書き込んだり、また書き写したりして、折々に講義をされ、弟子の方あるいは信徒の方にお話をされてきたようです。そして、最後の最後の最後にされたのが、また立正安国論の講義であったということをお話をして、立正安国というのは、まさに日蓮聖人の終生の課題。それをずっと追い求めて、法華経の教えを、宗学のリアリティというようなお話もありましたけれども、現実社会の中で本当に法華経の世界観に基づいて、人々が生活を営んでいくためにその立正安国という

ことを、キーワードとして提出され、その立正安国の完成した姿を、大曼荼羅御本尊として凶顕されたと思うのです。そういう意味では、法華経はもちろん素晴らしいですし、天台大師によって非常に高く検証され、それを受け継がれて、伝教大師に来て、日蓮聖人が最終的に社会化をした。本当にリアリティのあるものとして法華経の教えを敷衍をしていこうとされた。それが立正安国であり、その理想形が大曼荼羅御本尊だということを、やっぱり私達はきつちりと真正面から受け止めて、そこに参入すれば、大概の問題を解決していくいろいろな糸口がすべて出てくるというふうに、私は認識をしています。そのことを皆さんへの、私のラストメッセージじゃないんですけど、締めくくりに言葉としたいと思います。

司会 野坂上人、ありがとうございます。続いて、影山上人、お願いします。

影山 私がいろいろお話し申し上げておりますのは、やはり、そのリアリティということが、いつも念頭にあります。例えば今、日蓮聖人のご遺文を読むにしても、我々は今、自分の知見の世界でものを読んでいるわけですが、明治五年以前の僧侶は、僧院生活をして出家制を保っておりました。

そこで何が起きてるかと言うと、行学二道が、ちゃんとそこでそろっていたわけです。明治以降、大教院制度、つまり今の大学制度、東大を模して日蓮宗大学（立正大学）ができて、日蓮宗で一番初めの学者は、小林一郎先生が、『法華経大講座』を書きました。あの先生は、東大のヘーゲルの哲学が専門です。

つまり、我々が仏教を学んでいるように思いながら、実は西洋学の目の高さで論理を展開しているわけです。キリスト教的には、聖書をよく解釈、理解することが、キリスト教の信仰のベースにあるわけで、それから数学、物理、天文学ができてきてるわけです。

ところが、仏教は、あくまでも体験の相続が、ベースにある。ですから、文献を読んでも体験は出てこないというのが、その時代は当たり前のことだったのですが、明治以降、文献を読むことで、解釈することで仏教ができてきたというわけが、本来の仏教ではないというのが、私の出発点になっているわけです。

ですから、一度そういう体験的な理解、観念的なことを、観念化せずというところを前提にして、今日もちょっとお話を申し上げました。教化学は、そういう意味合いを含んでお話ししました。

それから、もう一つ大事なものは、私は現場でものを考え、現場からしゃべってます。なぜか。どんなりっぱなことを言ってもですね、今のままでは食えなくなる。布教の発信ができなくなる。これは特に戦後、昭和二十二年の農地解放以降、お寺の状況が、葬儀法要対応型で動いている。ゼロ葬になった瞬間に恐竜と同じように減んでいかなきゃいけない状況が来ますので、何とかそれ以外で口を賄える方向性をつけなきゃならない。

あえて、教義に触らずに世間が求めている、今の社会状況の中で宗教家がやってほしいと周りが思っている部分で、いやしとか救いとかというところに焦点を合わせて、私は論を展開したままでして。現場の立場で申し上げました。場が変わって、もし教義学で行くならば、教義でまたお話しできるかと思えますので、場が変わればまた違う話をするかもしれませんが、今日は私がずっとやってきたベースを基礎にしてお話ししました。以上です。

司会 影山上人、ありがとうございます。赤堀上人、お願いいたします。

赤堀 これは竹内上人がお答えになるのがよいのかもしれませんが、先ほど大西上人の、日本が、ハヤット神父がイラム化すると言ったことについて、私の考えていることを申し上げますと、日本は現在、ほぼ無宗教ですね。宗教があるとすると、道德宗教、ポランティア宗教、儀式宗教という名前の下での宗教ですね。日蓮聖人の教えを自らが

信じ、行っているなどというのは、僧侶の中にもどれだけあるか、非常に疑問であります。

そういう中で、日本はグローバリズムの中で、最もその顕著な、影響が表れやすい状況にあると。グローバリズムは、情報の共有化が進み、ボーダーレス化が起き、民族、宗教が統合されていく傾向にあると。ただしその反面、この普遍化の反面、原理主義が台頭し、民族主義が台頭してきます。普遍化していく中で飽き足らない、これはおかしいと言う宗教が起きてくる。これが法華系では顕正会、それから今、最も話題になつてるのはイスラム国。これは当然グローバリ化の中で必然的に起きてくる、一つの宗教的な出来事であります。そういう意味でおそらくは、「イスラム化が日本でも起きる」とおっしゃったのではないかと思うんです。

今、世界的には、解放の神学とか、ニューブティストの運動だとか、今までにない形の宗教が、世界の中で起きてきています。ことに、その民族の自立を支えるような宗教ですね、新しい形の宗教も芽生えてくるということも、想定されます。

私は、日本がイスラム化するかは分かりませんが、そういう状況を見ると、日本の文化に合致するというか、平和主義的なものを前面に出したイスラム教とか、そういうものが台頭するということは、十分に考えられるのではないかなと考えます。以上です。

司会 ありがとうございます。大西上人、お願いします。

大西 この十何年間にわたる立正安国・お題目結縁運動というものが、もし、このまま何にもせず、空白の何年間といわれる、いわゆる運動の失敗というものを迎えたら、私達にどういう負の遺産が残るかと言うたら、今の皆さんの兄弟子どもたちが本気にしないということですよ。

日蓮宗が何を叫ぼうが、何を言おうが、宗務所が何を言おうが、叫ぼうが、布教師会が何を言おうが、叫ぼうが、みんなもうその気にならないんですね。一緒になって踊ったら、えらいことになる。だから、もうこのままじっとしてよという事で、これで日蓮宗という、教団か宗団か分かりませんが、それが今もう崩壊しつつあるという事です。実際にもう半分崩壊している。これはもう誰も権威を認めないからですよ。

こういう状況の中でも、誰も動かない。誰も本気にしない。次にやってくる十年間は、よりひどい十年間。この中で、私は鎌倉仏教に始まった日蓮宗というもの、我々が日蓮聖人とご縁があるかどうかは別としても、日蓮宗がついてしまう。そういう今、危機的状況を、まさに迎えてると思うんですよ。

ですから、今日のシンポジストの方は、もう一人で戦っていかうと、おそらく思っておられるかもしれない。しかし、我々はこの日蓮宗に属してるんだ。だから、この日蓮宗の運動を絶対に失敗させてはいけない。で、その本体は誰だと言えば、私はこの現宗研の皆さんだと思っんですよ。この研究の成果、毎日のご苦労、これを日蓮宗に生かさなければ、何のための現宗研かと思っんです。

ですから、これは機構の問題もあつて、非常に難しいこともあると思うんですけども、もうそろそろ本気になって、この日蓮宗を日蓮聖人にご縁のある宗団、教団にしていかないと、ものすごい罰が当たると思っんです。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

司会 あえてノーコメントで。竹内上人、お願ひいたします。

竹内 いや、もう今、大西上人がおっしゃったことは、皆さん、皆さんほとんどの方が、心から、「そのとおりだ」と思われてることをご指摘になったと思っんです。私はそう思っんです。

やはり、次世代に人材を生み出すことのできるための、もうそこだけに絞り込んだ、この宗門の中で、やはり大聖人から命を預かり、大聖人から社会はかくあるべきだということを、私達が受け止めて、私達が大人のお心にかなうことのために、何が自分にできるのかという、自己に対する強い振り返りというか、反省が求められているんだと思います。

事実、人間はですね、自己人格を裏切ることにはできない。自己に対してだけは、自分はどうもつけないんです。そういう構造的な研究は、影山先生のご専門なんですね。

やはり私達はですね、自分に自分がうそをつかないで、後の、次の世代を守ってくれる世代の、次世代の若い人への先があるんだと、こんなふうに皆様と一緒に、素直にそう思える気持ちにさせていただければ、私は今日という日は非常に意義のあった、それぞれ素晴らしいことをご指摘になりましたので、私は素直にそう思っています。ありがとうございます。

司会 はい、竹内上人、ありがとうございます。竹内上人に総括をしていただいたような気がいたします。

進行役の不手際と申しましょうか、十分にこの舞台上で大曼荼羅世界を顕現しきれなかったところがあるかも分かりますませんが、きつと五人のシンポジストの方のお話を聞いていただいて、「あの曼荼羅世界の中に、われも入らねば」という思いを、皆様方、お一人お一人にお持ちをいただけたのではないかと、というふうに信じております。

時間が超過しております。これももちまして、特別シンポジウム、「現代と宗教を考える」を閉じさせていただきます。大変お疲れさまでございました。ありがとうございます。五人のシンポジストの方に、盛大な拍手をお願いします。